

# 研究の概要

下松市立公集小学校

## 1 研究主題

学ぶ喜びを育む授業の在り方  
～深い学びにつながる話し合い活動を通して～

## 2 主題設定の理由

本研究主題は次の3点を踏まえて設定した。

### (1) 学校教育目標から

本校の学校教育目標は「豊かな心にあふれ、一人ひとりが輝く公集っ子の育成 ～学ぶ喜び、ふれあう楽しさをすべての児童に～」であり、支持的風土のある学級づくりを基盤としながら知・徳・体のバランスのとれた教育を目指している。「学ぶ喜び」とは、子どもたちが「わかる」「できる」という実感をもつことであり、知識・技能が日常生活に役立つという充実感や有用感を感じることである。さらに、試行錯誤しながら問題を解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見とその解決に向けて進んで取り組むことができることである。「ふれあう楽しさ」とは、友達との関わりの中で、他者に対する思いやりの心を育み、みんなと協働することや、話し合い活動を通して自分の考えを広げたり深めたりすることである。これらの喜びや楽しさを子どもたちが味わい、学校教育目標を具現化するためには、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を行っていく必要がある。

### (2) 昨年度までの取組から

本校では、昨年度までの2年間、「認め合い、高め合いながらよりよい集団をつくろうとする子どもの育成」という研究主題を掲げ、特別活動の研究を進めてきた。その成果として、次の3点が挙げられる。

- ① 話し合いのスキルが向上し、理由を明らかにしながら自分の意見を上手に伝えることができるようになってきた。
- ② 友達の意見を尊重しつつ、みんなで合意形成しながら話し合うことができるようになってきた。
- ③ 決まったことをみんなと協働していこうとする実践力や、自ら課題を解決しようとする自治的能力も養われてきた。

これらの成果は、子どもたちが安心して自分の意見を話すことができる温かい雰囲気や友達に対する信頼関係、学級の一員としての所属感や子どもたちの自尊感情が育まれてきた表れである。これらの風土や感情は、本校が実践していこうとする子どもの主体的・対話的で深い学びを実現する上での素地となるものである。一方、今後に向けて改善していくべき課題として「相手意識をもって話し合い活動を行うこと」が挙げられる。自分だけが、一方的に言いたいことを伝えるのではなく、相手のことも肯定的に受け止めながら互いに伝え合うことで、自分の

考えがさらに広がったり、深まったりしていくことを期待したい。

### (3) 子どもの実態から

#### ① 平成30年度学力定着状況確認問題の結果から

平成30年度に4～6年生を対象に実施した山口県学力定着状況確認問題の結果を分析すると、学年によって多少の差はあるが、学校全体の正答率はおおよそ県平均正答率を上回っていた。しかし、設問ごとに比較すると県平均を下回っているものもあり、国語では、目的に応じて書くことに課題が見られ、算数では、順序立てて説明することや根拠を明らかにして説明することに課題が見られた。このことから、本校の児童には、目的意識をもって話したり書いたりする力や論理的に思考する力が必要であると考えられる。

#### ② 児童のアンケート（4月）の結果から

4月に学習についてのアンケートを行い、現状を把握した。

この結果から、本校の子どもたちはめあてや課題を意識して学習していることや、授業では友達の考えと自分の考えを比べながら聞き自分の考えをよりよくしていることが分かった。

反対に、今後の課題として学ぶことに興味関心をもち、自らの学習活動を振り返って、次への学習へとつなげるといった主体的な学習ができる子どもや相手を意識して自分の思いや考えを伝えるといった対話的な学習ができる子どもを育てることが挙げられる。

以上のことから、今年度はこれまで育ててきた支持的風土や話し合い活動の経験を生かしつつ、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行い、子どもたちが学ぶ喜びを感じながら協働的に課題解決に取り組むことができるよう本主題を設定した。

まず、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を進めるために、子どもの「深い学びの姿」とは、どのような姿なのかを想定した上で授業づくりを行わなくてはならない。つまり、単元の中で、子どもたちのどのような姿が表出すれば、深い学びにつながったといえるのかを考えた上での授業づくりである。

次に、主体的な学びを目指すために、子どもの実態を踏まえ、子どもの思いや疑問から生まれた課題や必要感を伴う課題を設定する。そうすることで、子どもたちが目的意識や見通しをもって意欲的に粘り強く学ぶことができるであろう。

最後に、対話的な学びの実現のために、子どもたちが相手意識をもち、互いに思いや考えを伝え合うことで、自分の学びを深めたり広げたりすることができるような支援を行う。そして、子どもたちのつぶやきや発表、行動、振り返りの記述等を観察し、それらがあらかじめ想定した「深い学びの姿」であったかを検証し、必要に応じて改善していく。以上のようなPDCAサイクルを確実に行うことで、子どもたちに必要な資質や能力が身に付いたのか、子どもたちの学ぶ喜びを育むことができたのかを研究していきたい。

### 3 研究仮説

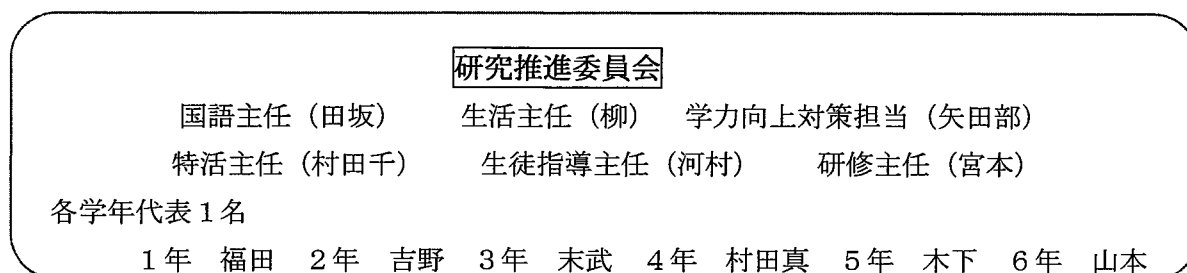
- 子どもの深い学びの姿を想定し、主体的に学ぶことができる工夫や対話的に学ぶことができる工夫をすることで、子どもたちは、想定した深い学びの姿に近付き、確かな学力を身に付け、学ぶ喜びを実感できるのではないか。

### 4 研究の視点

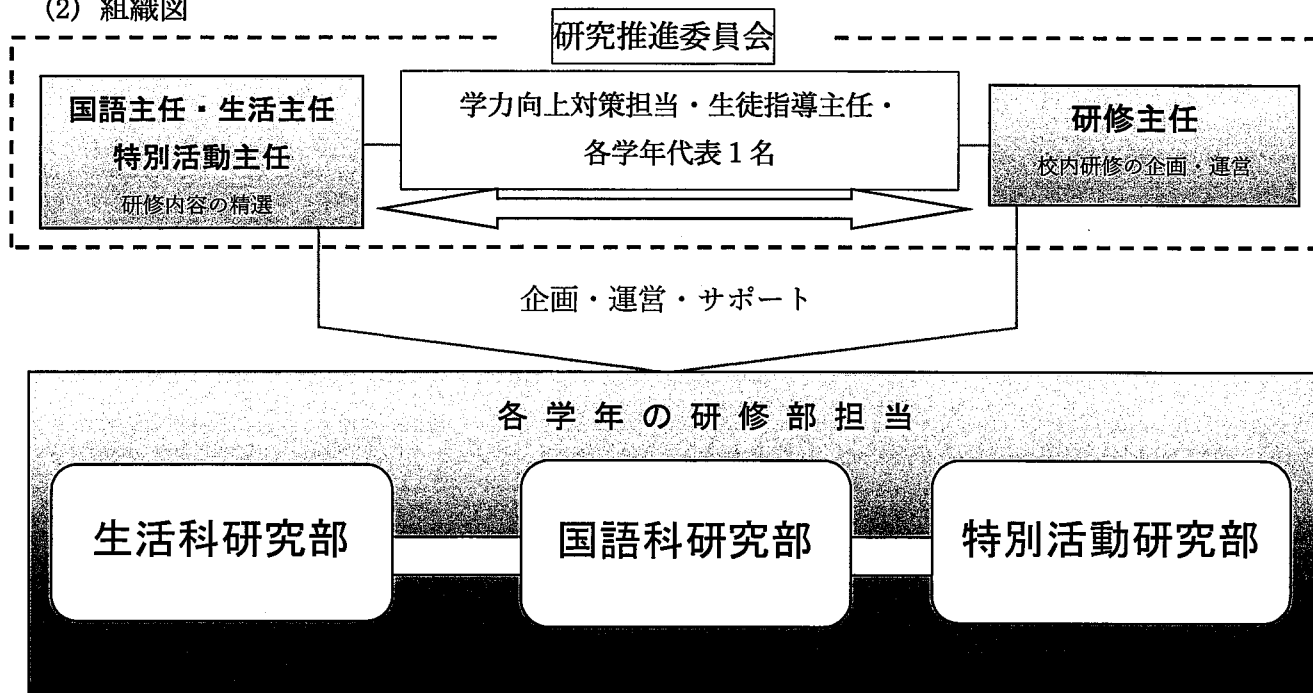
**視点1** 深い学びの姿を想定した授業づくり **視点2** 深い学びにつながる話し合い活動の工夫

## 5 研修組織

### (1) 研究推進組織



### (2) 組織図



## 6 研究内容及び具体的な研究活動

- (1) 生活科研究部、国語科研究部、特別活動研究部に分かれて研修を行い、共通理解をはかる。
- (2) 日々の授業実践を最も大切に、学力向上との連携を図りながら、各研究部のテーマをもとに計画—実践—検証—改善し、全体として取組の方向性の評価を行う。
- (3) 一人一授業では各研究部のテーマをもとに授業を組み立てて、授業を公開する（ただし、専科は教えている教科の授業）。子ども、教師の授業評価を行うとともに、授業後はミニ協議会を開く。授業記録、協議会記録を残し、成果と課題を明らかにして継続的な実践に努める
- (4) 実技講習を行い、互いに教育技術を教え合うことで授業力の向上に努める。

## 7 研究の成果と課題

### (1) 研修のまとめのグループ協議より

今年度の研修のまとめとして、2つの視点（視点1 深い学びの姿を想定した授業づくり、視点2 深い学びにつながる話し合い活動の工夫）に基づいて教職員による振り返りを行ったところ、以下のような成果と課題が出された。

#### ① 成果

視点1では、単元全体を見通した授業づくりを意識して行うことができるようになってきた。さらに、子どもが主体的に学ぶことができる課題設定ができ、既知・既習内容を意識した

発問や学びの軌跡が分かる掲示を行うことも増えてきた。また、学習と日常生活とのつながりを意識したことで、子どもたちは生きて働く知識・技能の習得ができてきた。

視点2では、単元全体で同じ流れの話合い活動を仕組んだことで、子どもたちが主体的に話し合うことができた。また、話し合う前に子どもたちに教材としっかりと向き合わせ、自分の意見を十分にもたせたことで、話し合うことへの抵抗が少なくなってきた。さらに、特別活動の経験が役立っており、学級会の話合いのマニュアルをもとに、言い換えたり、付け加えたりしてあらゆる教科でも効果的だった。

## ② 課題

視点1では、限られた時数の中で効率よく行い、単元目標を達成できるようにするための教師の教材研究が必要である。そのためにはカリキュラム・マネジメントを意識して、教科横断的な視点によるカリキュラム編成を行い、学習内容の精選や軽重を図っていかなくてはならない。さらに、単元計画を子どもたちに意識させるだけでなく、子どもたちと共に作るべきではないかという意見も出た。

視点2では、学習課題を子どもたちが話し合う必要性・必然性があるものにしないといけない。そのような課題を設定するには教師だけでなく、子どもたちがいかに教材と向き合っているかにかかっている。今回はそれがまだ十分ではなかったという意見があった。また、話し合ったことでどれだけ自分の考えが深まったかを見取るための振り返りが難しかったという意見もあった。

## (2) 今後に向けて

### ① 「人と関わる力」の育成につながる深い学び

深い学びの実現のために、教師は子どもたちにどのように働きかけていくべきかを研究しなければならない。本校は昨年度まで研究した特別活動を強みとしている。そして今、力を入れているのが「人と関わる力」の育成である。そのためにはまず、来年度も特別活動の研究を継続していくとともに、学級会での話合い活動のスキルを国語、道徳、総合などあらゆる教科で生かしていかなければならない。そして、子どもたちが話し合いたいと思うことのできる追究する価値のある課題設定が必要である。深い学びにつながる対話になるためには子どもたちが教材としっかりと向き合っておかないといけない。子どもたちは自分のこととして課題を捉えることで、意欲的に相手に伝えようとする。そして一方的でなく、互いに思いや考えを伝え合うといった双方向での話合いを通して、自分の考えが広がり、深まっていくであろう。このような対話があれば、子どもたちは学ぶ喜びを実感できるのではないかと考える。

### ② 「見方・考え方」を働かせた学習過程の工夫・実践

今年度は国語科と生活科と特別活動の3つに絞って研究を進めてきた。しかし、これからはカリキュラム・マネジメントの観点から考えて、「人と関わる力」を育てるための教科横断的な学習も研究するべきだと考える。そのためには、あらゆる教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を働かせて、学習過程を重視し、工夫して実践することが必要となってくる。また、その学習過程において、本校の強みである特別活動をどのように取り入れ、実施していくかを研究していかなければならない。